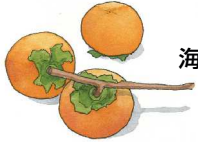


～モンゴル語研究最前線～



海外交流

中 嶋 善 輝*

From the Forefront of Mongolian Studies

Key Words : Mongolian Language, Turkic Languages

＜略号＞

AT. 古チュルク語, Hu. ハンガリー語, Ka. カザフ語, Mo. モンゴル語, PT. 先（～プロト）チュルク語, Trkm. トウルクメン語, Tu. チュルク語, Tur. トルコ語, Ru. ロシア語, 「*」 推定形

一昨年（2013年）、本学トルコ語専攻の大澤孝教授と、モンゴル国科学アカデミー考古学研究所との国際共同調査の結果、モンゴル国東部で古代トルコ語文字碑文が発見されたと発表（7月16日）がなされた。そして各メディアは、この発見を学術上100年ぶりの快挙であると報じたことは、私たちの記憶に新しい。

しかし、トルコ（共和国）はヨーロッパ側にあるのに、なぜその碑文がモンゴルで見つかるのか、今回はこのトルコとモンゴルについて述べてみたい。

さて、周知の通りモンゴル民族は今のモンゴル国の基幹民族であり、13世紀にチンギス・カンによる大帝国を築いた遊牧騎馬民族である。ところが、それ以前にモンゴル高原で活躍した遊牧民族は、匈奴以来、基本的にはトルコ系であったとみられる。彼らやその子孫はかねてより西方へと拡大し、更に東より進出したモンゴル民族に最終的に押し出された形になったのである。

ところで、モンゴル語とトルコ語は、言語特徴が類似し、音韻対応する共通語彙を多く持つ。このことから、昔の言語学者は両者の先祖はアルタイ山脈

付近で暮らしていたと推測し、ツングース諸語も加えて、アルタイ語族とかアルタイ諸語と呼ぶようになった。現在、モンゴル国や中国・内モンゴル、トルコ共和国などでは、共通祖語を認める立場の主張が強く、そのような立場からはアルタイ語族と呼び、まだ未確定であるとか、認めない立場からはアルタイ諸語と呼ばれる。

なお、トルコという用語は、狭義にはトルコ共和国のトルコを指し、広義にはトルコ系を意味する。トルコ系とは、トルコ語の他、方言関係にある諸言語やその話者民族を総称した言い方で、チュルク（テュルク）とも書かれる。従って、モンゴルで発見された古代トルコ語碑文とは、広義のトルコ語であり、この場合突厥語を表す（以下、広義のトルコ語をチュルク語と記す）。

さて、語族の証明には語彙の音韻対応が重要とされる。では、時にアルタイ語族とも呼ばれるモンゴル語とチュルク語には、どのような音対応が見られるのか。以下、若干の語頭子音の対応例を挙げ、観察してみたい。

- ① [Mo.t- = Tu.t-] Mo.tengis 海 : AT.teñiz 海
- ② [Mo.y- = Tu.y-] Mo.yara 潰瘍 : Tur.yara 傷
- ③ [Mo.ǰ- = Ka.ǰ-] Mo.ǰimis 果物 : Ka.ǰemis 果物 (cf.AT.yemiš)
- ④ [Mo.t- = Tu.t-] Mo.ṭala 外面 : AT.ṭaš 外
- ⑤ [Mo.d- = Tu.t-] Mo.durusu 白樺の表皮 : AT.toz 白樺の表皮
- ⑥ [Mo.d- = Tu.y-] Mo.düri 姿 : AT.yüz 顔
- ⑦ [Mo.ǰ- = Tu.y-] Mo.ǰalayu 若い : AT.yaš 若い (cf.Kaz.ǰas) (ǰ [ʧ], š [ʃ])



* Yoshiteru NAKASHIMA

1971年11月生

大阪外国語大学大学院言語社会研究科言語社会専攻博士後期課程修了（2006年）
現在、大阪大学 大学院言語文化研究科（モンゴル語専攻） 准教授 言語文化学 モンゴル語学、アルタイ言語学

TEL : 072-730-5261

FAX : 072-730-5261

E-mail : nakas@lang.osaka-u.ac.jp

①～④は、語頭子音がモンゴル語とチュルク語で1:1の対応をする例で、⑤～⑦は食い違う例である。また、語中・語末の子音において、①からは [Mo.-s = Tu.-z], ③からは [Mo.-s = Tu.(-s) ~ -š] が観察される。一方、⑤⑥からは、[Mo.-r = Tu.-z], ④⑦からは [Mo.-l = Tu.-š] が観察される。結論から言えば、①～③のような音対応例は、8世紀初葉に文献に記されて以来現代チュルク語へとつながる新しいチュルク語から、④～⑦はそれ以前の古いチュルク語（先チュルク語）からモンゴル語が借用したものと考えられる（z / šを持つチュルク語をZチュルク語、その箇所がr / lで対応するチュルク語をRチュルク語と呼ぶ）。

Rチュルク語は、古くは東ヨーロッパに進出し活躍したブルガル族（4世紀～14世紀；ブルガリアの語源）のブルガル語が知られ、墓碑や、ハンガリー語（例；Hu.tenger《海》：Tu.teñiz《海》(> Mo.teñgis《海》)) やロシア語（例；Ru. кобѣ [kav̩or]《絨毯》：Tu.kiviz《フェルト》(> Mo.kebis《絨毯》)) 等に若干その痕跡を残している。また、現代のRチュルク語は、その一派の後裔と見られるチュヴァシュ語のみが知られる。

なお、アルタイ祖語を認める立場から、④～⑦のような音対応例は共通祖語由来の語彙とされ、モンゴル語と、チュルク語であるチュヴァシュ語は、共通祖語由来のRを保持したものとされる。即ち、チュヴァシュ語は、モンゴル語とZチュルク語を結ぶ「生き証人」に位置づけられるのである。

ところが、筆者の見解では、モンゴル語に見られるR対応語彙も、チュルク語音韻推移の観点から見れば、共通祖語を認める根拠としては不十分と見る。

それはなぜか。以下、語頭音の体系をモンゴル語は『元朝秘史』（1240年ごろ）から、チュルク語はオルホン碑文チュルク語（8世紀前半）を例に見てみよう。

1. 語頭母音

『元朝秘史』モンゴル語：

a e i o ö u ü

オルホン碑文チュルク語：

a ä (e) i i o ö u ü

2. 語頭子音

『元朝秘史』モンゴル語：

b č d g h j k m n s t y

オルホン碑文チュルク語：

b č k s t y

さて、元来語頭母音の体系は、モンゴル語が7つ、チュルク語が8～9つと、両者は大差ない。ところが、語頭子音は、モンゴル語が12、チュルク語が6という具合に、チュルク語はモンゴル語の半分しかなかった（なお、広母音（a, o, u）が続く場合、Mo.gはγ-として、kはq（チュルク語も）という異音で発音される）。

では、④～⑦で見たR系語彙のモンゴル語との関係はいかなるものか。次にカザフ語のチュルク固有語的語頭子音を挙げよう。

Ka. : b-š (d-) k- m- s- t- j-

カザフ語は、オルホン碑文チュルク語のčはšに、yはj-に対応させる。また、若干のd-の発生は、主に語頭子音の有声化が著しい西方方言の干渉と考えられる。更に、m-の発生は主に鼻音が後続する語を中心にb-が鼻音化し、分化したものである。

このように見てくると、カザフ語の語頭子音の体系は、オルホン碑文チュルク語のものと大差なく、同じ子音の調音点を動かさない程度の音韻変化は許されることが分かる。とすると、⑤[Mo.d = Tu.t]は、PT.時代にTu.t-がPT.*d-であった可能性を、⑥[Mo.d = Tu.y-]は、Tu.y-がPT.*d-であった可能性を（多くの現代チュルク語は中世以降、語中・語末のdをyに変化させた。モンゴル語はそのdを通常dで対応させる；例）Mo.aday《最後》=AT.aḏaq《足》）示唆する。また、⑦[Mo.j- = Tu.y-]からは、Tu.y-がPT.*j-であった時代（ブルガル語はこの段階）を表すものと言える。なお、⑥から導き出したPT.*d-と、⑦のPT.*j-は、チュルク語の語頭子音の体系上共存できない。このことから、先チュルク語は少なくとも2種類存在していたことが分かる。

ここで、語頭が無声・有声口蓋子音として現れるR対応語彙を補おう。

⑧[Mo.k = Tu.k] Mo.quraya 子羊：AT.gozi 子羊

⑨[Mo.g = Tu.k] Mo.gölüge 犬等の子：

Trkm.köšek ラクダの子

これらを元に、先チュルク語を古いものから順にA, Bとすると、両者の語頭子音体系は、以下のよう整理できる。

PT.A: *b- *č- *g- *s- *d- *ð-

PT.B: *b- *č- *k- *s- *t- *j-

以上から、モンゴル語が接触してきたチュルク語は、次のように発展したものと結論付けることができる。

PT.A: *g- / *d- / *ð- R-Tu. > ⑤⑥⑨

└─▶ PT.B: *k- / *t- / *j- R-Tu. (ブルガル語)

> ④⑦⑧

└─▶ k- / t- / j- Z-Tu. (カザフ語等)

> ①③

└─▶ k- / t- / y- Z-Tu. (トルコ語等)

> ①②

更に言えば、この図式は、Mo.güür / kögürge 《橋》

: AT.köprük 《橋》のような、チュルク語の一単語が、複数のモンゴル語語彙に対応する例をもうまく説明できる。結局、両者の音韻対応は、ちょうど日本語の漢字音に呉音、漢音、唐音があるのと同じ現象なのである。

以上、簡単にまとめると、モンゴル語とチュルク語の音韻対応は、語族を証明できるものではなく、基本的には長期にわたる接触の歴史を物語るものであった。そして、古代トルコ語碑文がモンゴル高原で見つかる理由は、13世紀以降住民がモンゴル民族に置き換わるまで、長らくそこがチュルク民族の揺籃の地であったためである。

